

国際交流都市函館の地域ネットワークを活かした科学文化の醸成

地域の科学舎推進事業成果報告会(2009.10.31)資料

提案機関 | 函館市 企画部企画管理課 長谷山 裕一

運営機関 | 公立はこだて未来大学 金森 晶作

1. 企画の概要

「科学を文化に」をスローガンとして、観光都市、交流都市である函館の地域ネットワークを活かし、市民の日常生活の中に科学を文化的活動として根付かせる活動を推進して行く。中心となる3つの事業として、年に1度の科学フェスティバル「はこだて国際科学祭」、日常的な出前展示からの関係づくりや情報ネットワーク構築を担う「はこだて科学網」、科学コミュニケーションの人材育成講座「はこだて科学寺子屋」を行う(図1)。3年間の支援を受けて函館市の他、複数の高等教育機関、観光や水産業など、産学官民が協力した運営体制を整えることを目的とする。



図1: 函館における地域ネットワーク支援の3事業

2. 運営組織の展開

提案機関の函館市、運営機関の公立はこだて未来大学を中心に、函館市内の高等教育機関、大学間連携組織、まちづくり施設の管理団体、科学イベント主催団体から実行委員を得て、実行委員会組織「サイエンス・サポート函館」(代表:美馬のゆり 公立はこだて未来大学教授)を組織した(図2)。委員には上記函館市内の関連団体の他、函館外から、アートディレクターとして函館にゆかりのある建築家の高田傑氏、はこだて科学寺子屋の協力として北海道大学科学技術コミュニケーター養成ユニットの教員が参加している。

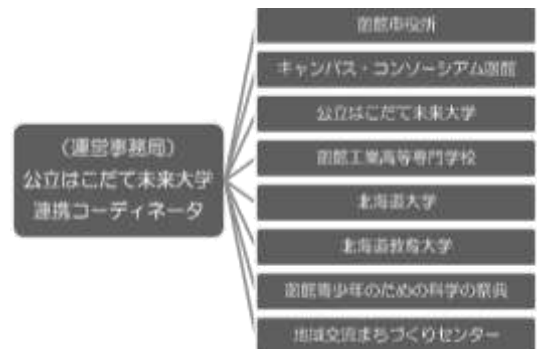


図2: サイエンス・サポート函館の構成

3. これまでの活動

地域ネットワーク支援の採択以降の主な活動を以下の年表にまとめて記載した。

表1: 函館における地域ネットワーク支援活動これまでの取り組み

年月	活動
2008年6月	JST 地域ネットワーク支援に採択
2008年7月	サイエンス・サポート函館発足, 3事業「はこだて国際科学祭」「はこだて科学網」「はこだて科学寺子屋」のフレーム設定, 月例実行委員会を開催
2008年8月	【はこだて科学網】地域イベント支援を通じたネットワーク作り開始
2008年11月	【はこだて科学網】ウェブサイトの開設, 地域の科学イベント情報を発信 【はこだて科学寺子屋】プロトタイプとなる市民向け2日間の集中講座実施
2008年12月	【全体】「キックオフ フォーラム」にて市民に活動を紹介 【はこだて科学網】出前プログラム「エネルギーラボ」のお披露目, 運用開始
2009年5月	【はこだて国際科学祭】はこだて国際科学祭2009のプログラム詳細決定
2009年6月	【全体】ウェブサイトの大幅リニューアル 【はこだて科学網】ウェブにて地域の科学者を紹介する「となりの科学者さん」連載開始 【はこだて国際科学祭】はこだて国際科学祭2009の記者発表
2009年8月	【はこだて科学寺子屋】3日間の集中講座を開催 【はこだて国際科学祭】はこだて国際科学祭 2009 の開催

4. 主要3事業の成果

4-1 はこだて国際科学祭

初回となる「はこだて国際科学祭2009」を函館開港150周年となる2009年8月22日-30日、9日間の会期で実施した。

4-1-1 はこだて国際科学祭2009；普及面の成果

のべ8,500人を動員し、新聞掲載数は50回(地域42, 北海道5, 全国1, 業界紙2; 記者発表[6月1日]以降)を数えた。雑誌、情報誌等での関連記事や情報掲載数は14件を確認している。また、北海道新聞社の協力を得てタブロイド版の詳細なプログラムを作成し、道南地域の北海道新聞購読者へ13万部を配布した。市内を走る路面電車の外面には、広告を2ヶ月間にわたり掲載した(写真1)。はこだて国際科学祭終了後には、函館のケーブルテレビ局 NCV(加入件数3万件超)が2回シリーズ、各回30分間の特別番組を制作し、2ヶ月間にわたり毎日2度ずつ放送している。函館市内の小、中、高等学校に約4万枚のチラシ、ニュースレターを配布し、子どもと、子どもを接点とした保護者にもアプローチした。



写真1: マークと広告を掲載した路面電車

4-1-2 はこだて国際科学祭2009；多彩なゲストの招聘

はこだて国際科学祭2009に、函館市民とは触れ合う機会がほとんどない著名な科学者、エンターテイナー、アーティスト等を招聘した。代表例として、ドクター・バンヘッド(英国の著名なサイエンスエンターテイナー; 初来日; 写真2)、海部宣男氏(天文学者、前国立天文台長)、あがた森魚氏(ミュージシャン; 中高年に多くのファン)、目黒実氏(子どもとアートについてのプロデューサー)、吉川謙二氏(永久凍土の研究者、極地探検家; 米国アラスカ州在住)、月僧秀弥氏(科学の鉄人等で活躍する科学実験のパフォーマー)が挙げられる。



写真2: 初来日のドクター・バンヘッド

4-1-3 はこだて国際科学祭2009；多様な出展者との連携

行政(函館市役所、北海道庁、JST イノベーションプラザ北海道)、財団法人(函館市文化・スポーツ振興財団、南北海道学術振興財団)、高等教育機関(はこだて未来大、函館高専、北海道大、道教育大函館)、学校教員(近郊の小中高39校から50人以上)、NPO法人、市民サークル(理科サークル、アマチュア無線の団体等)、企業(パナソニック、トヨペット函館、ともえ教材)、公共施設(市立函館博物館、函館市宮熱帯植物園)、ブリティッシュカウンシル、化学オリンピック日本委員会、函館五稜郭ロータリークラブ他、産学官民を含む多彩な組織からの出展、協力を得た。出展者として関わった人員は150名以上に及んだ。

4-1-4 はこだて国際科学祭2009；多彩なイベントによる特色の提示

科学を文化的な活動として市民に根付かせるために、はこだて国際科学祭に取り入れたいと考えている要素のほとんどを実際のイベントとして盛り込むことが出来た。イベントプログラム数は19種、各プログラム内のブース展示数等を含めて70以上のイベントを実施した。

1) 科学をまちに出す

大学や研究所ではない、市民の集う場所を会場に

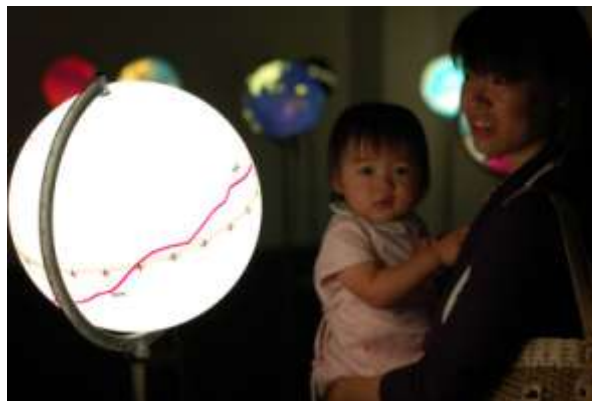


写真3: ワールドプロセッサー展

設定した。市内の3地区を会場とし、函館山麓の西部地区を大人向け、五稜郭地区を観光旅行者向け、湯の川地区を親子連れ向けに設定した。

2) アートから科学へ

科学以外のことに興味を持つ市民へのアプローチを考え、2009年はアート作品の展覧会を盛り込んだ。現代美術の作品展「ワールドプロセッサー」インゴ・ギュンター108の地球展を開催した(写真3)。

3) 大人の時間を演出

多様な年齢層にアプローチするため、大人向けのイベントも設定した。サイエンスライブ「宇宙をうたう」では科学者とミュージシャンをゲストに、音楽と科学が織りなすライブにて大人の時間を演出した。

4) 専門家との気軽な対話の場

専門家との双方向型コミュニケーションの場とするため、7夜連続の科学夜話(サイエンスカフェ)を実施した。

5) 函館にはなかった科学エンターテイメント

函館ではなかなか観ることの出来ない科学エンターテイメントとして、英国の科学エンターテイナー、ドクター・バンヘッドの初来日サイエンスショーを実施した。

6) 観光旅行者向けに地域をアピール

観光旅行者の集う施設、五稜郭タワーを会場の1つとし、行政、大学、博物館、市民活動団体が出展する科学屋台を実施した。

7) 子どもを対象としたイベント

実験教室等30以上の子ども向けイベントを盛り込み、子ども、親子連れ向けにアプローチした。

8) 議論のある問題も扱う

科学と社会の問題についての研究発表会「サイエンストーク」を実施した。



写真4:五稜郭タワーの空間演出

4-1-5 はこだて国際科学祭2009; 空間デザインによる演出

手作りながら、祭として魅力的な空間を演出した(写真4)。アートディレクターを中心にデザインを行い、公立はこだて未来大のプロジェクト学習により専門家の指導を受けた学生が空間やマテリアルをデザインした。

4-2 はこだて科学網

本支援により整備した発電に関する出張体験型プログラム「エネルギーラボ」を中心に、地域イベントへの出展や地域コミュニティ向けの出張展示を9回実施した(写真5)。また、科学イベントへの消耗品等の支援を通じた、関係作りを行った。支援数は13件となった(一部、出前を行ったイベントと重複)。出張展示先としては、地域の公民館や学校を中心とした地域コミュニティ、商店街のお祭り、科学のみを文脈としない複合型の地域イベントが挙げられる。

ウェブサイトではネットワーク作りのきっかけとして、函館近郊の科学技術に関連したイベント等の情報を収集し、約420件掲載した(2009年10月現在)。また、地域の科学者を紹介する「となりの科学者さん」や、スタッフへインタビューの連載を行っている。ウェブサイトの運営自体もネットワーク作りの呼び水となった。具体的には、情報収集と発信は市民ボランティアの協力を得ている。また、各コンテンツの取材執筆には、市内大学の複数の学生団体が協力している。



写真5:地域のイベントへのエネルギーラボの出展

4-3 はこだて科学寺子屋

講座の設計に、科学コミュニケーター養成に実績のある北海道大学科学技術コミュニケーター養成ユニットの協力を得て、これまでに2度の集中講座を実施した。2008年11月にプロトタイピングとして実施した2日間の集中講座には、一般市民、学生等15名が参加した。2009年8月には、はこだて国際科学祭のスタッフ養成を主目的に3日間の集中講座を実施した。この講座は函館市内の高等教育機関の連携組織「キャンパス・コンソーシアム函館」の単位互換プログラムにも設定し、学生、一般市民等20名が受講した。受講生は、はこだて国際科学祭2009に主に記録スタッフとして参加し、課題として各イベントのレポートを取材執筆した(写真6)。



写真 6:取材をするはこだて科学寺子屋受講生

5. 函館の地域ネットワークの特徴と課題

函館の地域ネットワークは、はこだて科学網で展開される、従来から科学関連イベントを実施してきた団体との繋がり作りや情報プラットフォームと、科学フェスティバルはこだて国際科学祭を通じた連携から成り立っている。特に「はこだて国際科学祭」は、お祭り、まちづくりとしての文脈を併せ持ち、広報にもリソースを集中的に充てているため、産学官民に対して連携や協力を呼びかけやすい。

本企画では函館市が提案機関として主体的に活動している(参考:写真7)。公立はこだて未来大学、キャンパス・コンソーシアム函館、南北海道学術振興財団の各事務局や、はこだて国際科学祭会場となった函館市民会館に函館市の職員が所属していることも、連携をスムーズに進める大きな要因となっている。逆に、函館市や参加組織が直接関与していない産業界との連携は乏しい状況にある。

実際の活動では、企画の立ち上げに参画したメンバーや協力相手が所属組織の本来の業務の外にボランティアに活動している例が多い。関係者へのインタビューから、精力的な活動の支えとなっている要素として、函館へのシビックプライド、つまり函館という地域に対する愛着心が大きいということがわかってきた。

今後に向けた課題として、特に産業界との連携強化と、世代交代を見据えた若手の育成が挙げられる。産業界との連携に向けて、次年度のはこだて国際科学祭2010(2010年8月21日-29日開催)ではテーマの「食」を足がかりに、地域の水産業、観光業との連携を深めていく。また、現在の活動の中心メンバーそれぞれが果たしている役割を分担し次世代に継承出来るよう、科学寺子屋や実際の活動を通して若手の育成にあたっていく。



写真 7:はこだて国際科学祭 2009 にて挨拶する西尾正範函館市長(右)。左はサイエンス・サポート函館の美馬のゆり代表。

本企画と、はこだて国際科学祭についての照会、連絡先:

■ウェブサイト:

<http://www.sciencefestival.jp/>

■担当者:

コーディネーター 金森 晶作 (かなもり しょうさく)

公立はこだて未来大学特別研究員 / サイエンス・サポート函館コーディネーター

e-mail: kanamori@fun.ac.jp

電話: 0138-34-6527 FAX: 0138-34-6383